

平成 30 年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	2年間の目標 (平成30年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月16日実施)	総合評価（月 日実施）	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	将来の日本や国際社会でリーダーとして活躍できる高い資質、能力をもった人材を育成する教育課程編成、及び学習指導に学校全体で取り組む。	①新しい学習指導要領を踏まえ、発展的で高度な内容の授業実践を組織として充実させる。 ②新しい大学入試制度を視野に入れつつ本校にふさわしい新カリキュラムの検討を始める。	①教科の枠を越えた授業互見の雰囲気醸成及び湘南高校での授業実践に関する各教科での研修の実施。 ①進学重点型主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の研究の推進。 ②新しい大学入試制度のさらなる情報収集。	①授業研究発表会において、発表者個人の研究ではなく事前に教科として研究授業の内容を把握しアドバイスができたか。 ①校内職員対象進学重点型主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業研究説明会に参加できたか。 ②新しい大学入試制度の情報を職員に提供できたか。	①10月11日に授業研究会を実施した。 ①大阪府立北野高校、京都市立堀川高校に2名の教員を派遣し、両校の取組について校内で報告会を実施した。 ②新入試に関する情報提供を会議等で随時行った。	①県外の高校へも学校視察に行けたことは大きな成果だが、北野高校や堀川高校のほかにも行く機会を作る必要がある。可能な限り、学校視察の機会を増やしたい。 ②新入試に関する情報に職員が触れる機会をもっと増やしていく。	①他校訪問の取組は評価できる。学校評議員の会議でも内容を報告するとよい。 ①今でも堀川高校に注目する理由を説明いただき納得した。 ②探究など新しい教育課程編成に向けた取組が進んでいることがよく分かった。	①優れた実績のある他校を視察できた。さらに、授業改善WGを3回開き、学校視察の報告会や本校の授業改善の検討ができた。 ②WGのメンバーが積極的に新学習指導要領や高大接続にかかる勉強会に参加できた。 ①②WGのメンバーが得た情報を全職員にどのようにシェアしていくかが課題である。	①②授業改善WGのメンバーが得た情報を全職員に十分シェアできるように、職員会議の後やコミスクなどに行う報告会等の充実を図る。 ②学習指導要領や高大接続にかかる様々な勉強会の情報収集及び教職員への紹介に努める。
2 生徒指導・支援	①次世代リーダーとして、望ましい社会性、高い規範意識、心豊かで他者を思いやる人間性を育成する。 ②組織的で丁寧な個別の支援体制を確立する。	①部活動等を通し、次世代リーダーとして社会貢献活動やボランティア活動の一層の推進を図る。 ②学校いじめ防止基本方針や支援教育の視点を全職員が共有し、個別の支援のためにケース会議の充実を図り、課題の解決にあたる。	①部活動等が自主的にできる範囲の社会貢献活動やボランティア活動を提示する。 ②管理職、担任、養護教諭、教育相談コーディネーターとスクールカウンセラーが連携し、個別の支援のために相談機関等を活用してケース会議で支援方針を立て個別支援シートに蓄積していく。	①部活動等を通した社会貢献活動やボランティア活動が昨年の5部活から増加したか。 ②ケース会議での取り組みが支援に必要な生徒の指導に生かせ、課題解決につながったか。	①部活動等を通した社会貢献活動やボランティア活動が6部活となった。 ②ある生徒は、ケース会議の取組により、クラスになじむことができた。	①部活によるボランティア事例を校内で情報共有することにより、社会貢献活動やボランティア活動への参加数を増やす。 ②ケース会議を必要とする事例への迅速な対応が課題である。学年会の中にケース会議を取り入れるなど効率良く行う工夫を重ねる。	①中学校との交流が部活動の取組で行われていることがわかり、良い取組であると思う。 ②ケース会議について具体的な説明をいただき、その取組の意義をよく理解した。	①日ごろの地域貢献活動が評価され、ジャグリング部 Tip-Top が「かながわ部活ドリーム大賞」に表彰された。 ②ケース会議を開くことで、配慮が必要な生徒の情報を、学年を超えて当該生徒にかかわる教職員で共有することができた。ケース会議に勤務日の関係でスクールカウンセラーが参加できないことが課題である。	①敷地内を自主的に清掃したり、日ごろの活動の成果を地域で発表するなどの地道な地域貢献活動を広く発信するとともに、部活動での中学生との交流も継続する。 ②スクールカウンセラーが参加できないときは、事前に養護教諭などに情報提供をしてもらうなどの工夫に努める。

	視点	2年間の目標 (平成30年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月16日実施)	総合評価(月日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	一人ひとりが将来を見据え、主体的に進路実現できる生徒を三年間を通して育成する。	①公立高校のフラッグシップであることを認識し、生徒が希望する難関大学進学を実現するため、最後まであきらめないよう粘り強く丁寧な指導を行う。 ②公立高校を牽引する役割としてふさわしい進路実績のさらなる向上を図る。	①②学力向上へ向け、進路希望や成績データを担任、教科担当者、部活動顧問などが共有できる組織づくりを進め、入学から卒業までを見通した進路指導体制を確立していく。 ②職員の授業研究会や入試問題研究会等への参加者が、昨年の27名から増加したか。	①模試の活用等により、学力の定点観測を行えたか。 ①生徒の進路希望や実力テストの情報共有できたか。 ①集会指導や講演会、説明会を通して本人、保護者へ複数回の丁寧な情報発信を行ったか。 ②職員が授業研究会や入試問題研究会等への参加者が、昨年の27名から増加したか。	①模試の活用等により、学力の定点観測を行った。 ①各学年で生徒対象の講演会や説明会及び保護者対象の説明会を実施できた。 ②職員の授業研究会や入試問題研究会等に延べ43名が参加した。	①定点観測にはデータの蓄積が不可欠である。引き続き、模試等の活用により、学力の定点観測を継続する。 ①講演会や説明会の内容をさらに精選していく。 ②全職員が授業研究会や入試問題研究会に参加できるわけではないので研究会で得た情報の共有を図る。	①各学年の生徒や保護者を対象にした説明会等を何度も実施し、情報提供に努めていることがよくわかった。 ①進路指導において、「目標をあきらめさせない」「個の希望に応じた」などの文言を含めてはいかがか。 ②高大接続改革の情報収集に努めていることがよく分かった。	①進路支援グループが進路の取組の方向性を明確に示しているため、組織的な対応ができてきている。 ①進路講演会を生徒対象や保護者対象にそれぞれ実施できた。 ②高大接続にかかる勉強会に進路グループの職員が積極的に参加した。	①グループのメンバーが転勤等により変わっても、組織的な取組ができるよう引継ぎをしっかりとっていく。 ①目標の文言について検討する。 ②進路支援グループが得た情報を全職員に十分シェアできるよう、職員会議の後などに行う報告会等の充実を図る。
4	地域等との協働	地域との協働、連携による開かれた学校づくりを推進する。	①ホームページや学校説明会等の広報活動の内容をさらに充実させ、開かれた学校づくりを一層進める。	①最新の必要情報を提供できるようにホームページや学校説明会を改善していく。	①ホームページが適切に更新できたか。また、学校説明会等の広報活動により本校への理解度を高めることができたか。	①ホームページを活用し部活の結果等を迅速に更新できた。また学校説明会のアンケートはほぼ満足したとの回答であった。	①引き続き、ホームページを活用した迅速な情報提供の充実を図る。学校説明会は担当職員の引継ぎを意識した役割分担を図る。	①地域との連携において、その一つとしての小学生フェスティバルは非常に良い取組である。今後も継続してほしい。	①ホームページの更新が迅速にできた。県のシステム変更により、今後は新しいホームページの仕組みを構築する必要がある。	①新しいシステムによりホームページ作成が容易になることを受けて多くの職員が関わられるような取組を図る。 ①小学生フェスティバルの更なる充実を図る。
5	学校管理 学校運営	社会から信頼される学校づくりを推進し、事故、不祥事の防止を徹底する。	①事故、不祥事防止について不断の意識徹底を図り、根絶に努めるとともに、保護者、県民への丁寧な対応に努める。 ②D I Gの実施など、安全、安心に対する意識の向上を図り防災対策の充実に努める。	①日常業務で注意意識が薄れぬよう、定期的な事故不祥事防止会議を実施する。 ②「都心南部直下地震」等に備え、実践的防災訓練として、D I Gを実施する。	①不祥事防止会議を適正に実施し、不祥事を0件にすることができたか。 ②緊急時における人員掌握及び保護者への連絡体制を整えたか。実践的防災訓練として、D I Gが実施できたか。	①事故防止会議を毎月開催した結果、不祥事0を達成した。 ②授業でD I Gを取り入れ1学年全員360名が実施できた。	①迅速、的確な情報提供や注意喚起に努め、不祥事0を継続する。 ②学年全体でD I Gに取り組めたことに満足せず、引き続き取組の充実を図る。	①今後も不祥事0に取り組んでいただきたい。 ②地域防災の視点からも、D I Gの取組は非常に良いと思う。	①事故を起こすことがなかった。引き続き職員の意識啓発を図ることが課題である。 ②D I Gに取り組む生徒数を増やすことができた。	①職員が常に高い意識を持ち続けるよう、打合せや会議で情報提供に努める。 ②D I Gの取組の充実を図る。